
続検品母

広川恵三

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

続検品母

【Nコード】

N7112E

【作者名】

広川恵三

【あらすじ】

私の携帯小説が事件を予言?!小6が同級生はさみで刺す香川、児童相談所に通告http://www.tokyo-np.co.jp/s/article/2008111701000866.html子供を検品するような母親に育てられた少女が起こした少年犯罪。その後。

（前書き）

優性思想に浸る夫婦の子の少年犯罪。

その後の崩壊。

優性思想

ダウン症

出生前診断

羊水検査

モンスターペアレント

山口洋子は、食べ終わった食器を配膳車に下げられるくらい、回復していた。

「あ、全部キレイに食べたのね。」

看護師の金沢智子が、嬉しそうに言う。

病院の食事は不味いと、差し入ればかり食う患者や、拒食症で、箸を付けない患者も多いのだ。

「あつさりした食事、久しぶりですからね。」

「そうねえ。つい、家でもこってり系になってますわね。」

金沢智子は、家族に作った食事が、グラタン、てんぷら、カレー南蛮と、コテコテなもんばかりなのを反省しつつ言った。

「いや、うちじゃ、あつさりしたの作れないから。」

「というと？」

「一郎は、牛肉、刺身、白いごはんしか食べないの。」

「じゃあ、尿酸値とか心配ね。」

「それは、問題なし。AHCの各種サプリやサンGグリーンで、余分な栄養素を排出し、足りない栄養素を取り入れているから。」

「サンGグリーンは、いい青汁よねえ。で、食費嵩みますわね？そんなメニユーじゃあ・・・」

「それも問題ないの。しっかり稼いでいるから。一郎は、粉モノや、野菜料理を、貧乏人が喰らう食事として、忌み嫌うの。ステーキに添えたレタスもブチトマトも食べない。でも、飾りとしては、要るって。あゆみと緋那は、『パパはどうして残しているの』『どうしてお肉やお刺身が倍なの』と聞くのだけれど、『パパは大人だからいいの』『パパはお給料を貰っているからいいの』と言うの。」

金沢智子は、返す言葉がなかった。フランスの偉大な料理人、ブリオ・サラバンは、「あなたの食べているモノを聞けば、あなたの性格がわかる。」と言うが、一郎の人柄もわかるような気がした。同じような食事傾向の、男を見たことがあるが、頭はいいが、人間ならでわの、深みや奥ゆかしさがまったく無い。いや、牛肉、刺身、モレパトリのの一つとしてはいいのだが、お好み焼きも筑前煮も食べなきゃ。

「牛肉、刺身のレパトリを変えなきゃおこられるから、それが大変なの。ほかの奥さんが食費でレパトリを考えるのが大変なのとは違ってね。」

洋子は自慢げに言う。

「ステーキ、肉巻き、カツ、ローストビーフ、照り焼き、ビーフストロガノフ、煮込み、すき焼き、カルパッチョ風刺身、中華風刺身、マリネ風刺身、タルタル、ネギトロ、軍艦巻き、鉄火丼、土佐風刺身・・・」

「なかなか、考えてはるわね。」

金沢智子は、ため息混じりに答えた。智子が看護師に憧れていた小学生の頃、精がつくのは肉（特に関西では、肉と言う表現は牛肉を指す。）や刺身だと言われていた。

だが、今は少し違う。牛肉、刺身も食べても、いいが、それよりも小さい魚や国産大豆、緑黄色野菜が勧められる。特に、牛やマグロのような、生物濃縮が激しい食材は、重金属・

有害物質がしつかり、溜まっているからだ。妊婦も、金目鯛はあまり食べては、ならない。

「じゃあ。」

洋子は、趣味のいい、フェリシモのガウンを翻して、病室に戻った。これらのお洒落なホームウェアは、洋子が頼むと、嫌々病院に宅急便を送ってきたものだ。

。精神病院など足を踏み入れたくないのは、相変わらずだ。こつした患者との会話も、精神病院看護師の仕事だ。

金沢智子は、洋子と別れてから、「だからキレるのよ。」と思った。重金属 は、中枢神経を何時の間にか、蝕んでしまう。まして、体重がない子供など．．．また、野菜料理を 美味しく食べさせる食育も、母親ができていない。それは、本当に、食事自体を味わおうという精神状態をはぐくむ家庭が少ないから。夫婦の話もできない。代わりにテレビ。食卓は見栄えと食費の相談。食卓での子供の叱責。食事すら、財産である子供のレベルアップのための仕事。智子のそんな連想は、かつて、無理強いされた食事を思い出させ、PTSDを起こさせた。深呼吸すると、受け持ち患者の処置の確認をし、注射剤を用意し始めた。

吉富麗華のうちに、クラスの子が寄っていた。

以前は、山口あゆみの家に寄っていたのだが、ああゆうことになってから、麗華の家になっていた。寄ってきたのは、女子でも、容姿が良く、家庭もきっちりした5、6人ほど。

「わあ、100色もあるの？」

が、色鉛筆を見て、歓声を上げる。

「ママが、500色買ったから、お古なの。」

と言うと、みんなは顔を見合わせた。

「トーンも、いっぱいあるよね。漫画の背景のは、だいたい．．．」

「これも、お仕事のいらんくなったの。だから、使いさしだけど。」

吉富佳代子は、イラストレーターなので、画材はいっぱいある。

30畳ほどのリビングは、カラフルな画材と女の子で、おもちゃ箱をひっくりかえしたようだ。

みんなは、イラストを描いたり、漫画を描いたりしている。マニアックな色も多いので、イメージに合った毛色や服ができる。

「ああ、その瑠璃色貸してよ。」

「待つて。」

「こうぞ色ない！」

吉富麗華もイラストを描きながら、複雑な気持ちで居た。

ふだん、コイツらは、かわいい子ばかり寄って、私の事スルーしていたのに、なんやねん。

山口あゆみちゃんの事件から。だいたい、図画工作の時間に、春山璃々杏が、「麗華ちゃんとかなんて100色あるのよ。」と言

い出すから、いけないんよ。

小学校3年生ともなると、容姿や成績なんかでグループが分かれる。麗子像に似た吉富麗華は、かわいい子のグループには、相手にされず、それ以外の地味な子のグループでいた。

差別・格付け意識もあるが、子どもながら、レベルの違う子同士は話が合わないからだ。

なのに、かわいい、だけで寄っていた、山口あゆみのグループは、シヨックで求心性を失い、止まり木を求めて吉富麗華の所にやってきた。

「リビング、山口あゆみちゃんとかより広いな。」

「30畳みたい。」

麗華が答える。

「うわあ。狭いアパートより広いやん。」

「山口あゆみちゃんとは、ファンシーだったけど、ここはスタイリッシュやわあ。」

「パパもママも、ゴタついたので、イヤだから。」

山口洋子・あゆみ親子は、デコレーションが好きで、インテリアから、小物までデコだらけなのだ。玄関には、動物園をテーマにしたディスプレイ。居間には、すべてローラーシュレイのファブリック、三段重ねのティーセット。お子様に出すおやつは、手作りのが

リボンやシールに飾られたのである。

イラスト描きに飽いた子が、テーブルの主婦雑誌MATEを見始めた。

生活を楽しもうと言うコンセプトが、周りを飾り立てるということになっている雑誌だ。食材はコストコ、お弁当はデコレーション、インテリアのディスプレイ、デコ携帯電話・小物、究極はわが子も揃いのコーディネート。

「山口あゆみちゃんとか、この本の通りなんよ。たしか3月号、お母さんと出てたよね。」

「知らん。」と、麗華。

「あんだ、ホントに関心ないんやな。」

「うん。ママが仕事で要るから、何号かあるけど。」

「イラストはあんまりないよ。」

「デコレーションのアイデア、企画してるの。」

すると、一同に山口洋子・あゆみ親子が、出た位の波紋が広がった。MATEは、親子共々、ある程度の容姿でないと出れないのだ。その、MATEを企画している、と言うと・・・

それでも、麗華は淡々としている。

山口あゆみが、チャホヤされてるの、矛先が急にこっちに向いてきただけやん。アホらし。しかも、山口あゆみは、家に呼ぶ取り巻きを選別していた。そして、タレント気取りで、君臨してた。なまぬるい目で、オチしてきたけど、まさか、うちに来るなんて。

「そろそろ、お家の人が心配しているわよ。」

という、吉富佳代子の声で、子ども達は片付けに掛かった。

山口洋子は、6畳一間のアパートに落ち着いていた。

ソーシャルワーカーの磯本悟が、しばらくの生活保護を申請し、い

つしよに職探しをしてくれることになっている。

昭和50年代のゆったりした本間だが、あちこち煤けて、すみっこに家から運び出した、衣装ケースが積まれている。家電はオーブンレンジと洗濯機、冷蔵庫だけ、リサイクルショップで格安で見つけてくれた。一郎とは離婚の調停中で戻れないのだ。

玄關脇の流し台には、ソーシャルワーカーが100均でそろえてくれた最低限の食器とフライパン、ミルクパン。しみつたれた一郎は、ジノリはおるか、露天で買った食器すら渡してくれない。

ある程度の生活水準で育った洋子にとって、このいきなり神田川な生活は悪夢でしかなかった。神田川では、愛し合う男女がその生活だが、ただ一人、生活を立て直し、子どもを迎えるしかない。緋那はこんな部屋になんていうだろうか？それを思うと涙があふれてきた。すると、急に携帯が鳴った。

「工藤工業の古川ですが。面接の日は、8月の2日・・・」
ハローワークで見つけてくれた案件だった。

面接に出かけてみると、いかにも叩き上げ社長という感じの古川は、山口洋子の美貌に多少面食らったようだが、子ども2人連れて離婚してやっていこうということが履歴書に書かれているのを見て、いたわりの視線を向けた。洋子は、こんな地方の温泉に集団で来る中高年のような奴にそうされて、大いにムカついたが、ぐっとこらえた。

鉄骨プレハブが並ぶ工場群の事務所。映画の不良少年の乱闘シーンでしか見たことがなかったが。

「8時半出社で、5時上がりですが、残業がある日もあります・・・」

「

その後、山口洋子はどうしたか覚えていない。いつのまにか電車を乗り継いで、なんばにいた。OLのころは、庭のようにしていたと

ころだ。高島屋の玄関は、都会でのステージのようで、梅田より雰
囲気がある。かつての洋子と一郎のようなカップルも多く、せわし
げに通り過ぎる。大部分は、洋子たちより、イケていないご面相だ
が。

以前は、そういうカップルを見下す事も愉しみの一つだったが、今
は洋子たちが見下される立場なので、そういう余裕はない。これか
ら、すずしいビヤガーデンかクラブに繰り出すのか？

さすがにああゆう事件の後なので、メイクを変えて、人相を変えて
いる。その点は、個性の強くない美人顔で良かった。个性的なお顔
立ち。スは、メイクしたって、その人だと判るもの。だれも、山
口洋子だと気づかない。

ふらふら歩いていると、ナンパ橋のところで、歌舞伎の松の廊下の
台詞のように声が掛かった。

「お茶せえへん？」

30くらいの、いかにも「もうかってます。」な、いい服地のスー
ツ。背は165cmと低いが、わりと見栄えのする目鼻立ちの男だ。
以前なら、得意げになって断るのも愉しみとしていたが、今日は違
う。

言われるまま、飲食店に入り、食事した後、知らぬ間にホテル街に
来ていた。

「疲れた。休んでいこう。」

ラブホテルに入り、やる事が終わると、男は、

「携帯教えてよ。」

と言う。教えると、メモリ登録して、名刺と何枚かの万札を渡して
きた。

「イーベンチャーのCEOや。会える時間は決めにくいけど、いつ
でも連絡してきて。」

男と別れると、また電車に乗ってアパートに着いた。
そして、そのまま布団を敷いて眠り込んでしまった。

気が付くと、もう朝9時。出社時間はとうに過ぎている。今日行くはずだった会社のものらしい、着信履歴が何個もあった。

「昨日の様なお仕事ができるなら、工場で働くこともないわ。」

だから、無意識にケータイが鳴っても眠りこけていたのだろう。

山口洋子は、アパートを出ると、またフラフラと歩き出し、目に留まった喫茶店に入った。モーニングを食べていると、営業周りの途中で腹ごしらえをしている社長さんらしい男が声を掛けてきた。

「これから仕事？子どもさんを送った後なの？」

といいつつ名刺を渡してきた。

につこりOL時代に使っていたスマイルをして、店を出た。

それから、コンビニや本屋で時間を潰し、ランチタイムを少し過ぎたイタリアンレストランへ。

ランチメニューは、地場産の食材を使い、

赤舌のカルパッチョ、

水ナスと地鶏のミルフィーユ、

落のキャラメリゼのパスタ、

たまねぎのアイスクリームとコーヒーだ。

そこで、ランチを食べていると、かつての洋子たちのようなママ友集団が子どもを走り回らせて放置している。あーあー。どれもたっさい女ばかりだ。愉しむように見回してやると、その中の15号サイズの似合わないアッシュ金髪の女が睨んできた。洋子は、艶然と笑った。すると、

「あの人、用もないのにこっちを見てる！」

と、女がママ友にふれて回る。

見苦しいおんななどもがいつせいに睨んできたが、洋子は、平然としていた。

これを潮に、ママ友集団はお会計に並んだ。

その後、コーヒーのおかわりをしていたら、マスターが小さいケー

キを出してきた。

「ほんま、ああゆう集団かなわんけど、お客さんやからな。」

「どこにでもいるでしょうに。」

「いや、うっかり、食べ歩き手帳の取材、受けてもうたんよ。」

「自業自得。」

2人は、笑った。

その後、マスターが名刺を渡してきた。

「今度、まかない料理、ごちそうするよ。常連さんにしか出せへんのや。」

店を後にすると、大きい公園があった。遠くにママ友らしき二組の親子が、子どもを遊具で遊ばしている。

ただ、遊んでいる二人が、ママ友特有の緊張感がなく、容姿がチグハグな組み合わせなのだ。女は、自分の容姿レベルにあわせて、つるむ相手を決めるのに。

一人は、かつて取材を受けたMATEにも出られるレベル。

もう一人は、155cmの5号サイズ。目鼻立ちは土人形のようにちんまりしている。

「節子ねーちゃん。」

派手な女の方が、そう呼んだので、姉妹らしい。

ははーん。うちらみたいな美人姉妹と違うのやな。子ども時代は、容姿のせいで仲が悪かったでしょうに、子どもができて和解したってことか。

え？節子？文化教室でいつしよだった？地味すぎるから判別できなかったけど・・・教室では、ちまちました目鼻に必死で色を載せたメイクなのに・・・

やばい、やばい。山口洋子は退散した。

彼女達のような、平和はもう味わえない思いながら。

山口洋子の予想通り、浜緑地に来ていた姉妹は、子どもができてから、和解して遊んでいるのだった。妹、長谷川百合子（ふたりの旧姓は梶本）に呼び出された田中節子は、妹ならと、そんなにオシリも重くならずに、出てきていた。田中節子は、人員あわせのときのみ、呼ばれやすく、女特有の値踏みのおかずにされるので、最近 は他人の集まりには行かない。

長谷川百合子の子、正太が、大型木製遊具から叫ぶ。

「敬子！来いよ！」

「ああーん！怖い．．．」

田中節子が、手を貸してやると、敬子はなんとかよじ登った。

「ねーちゃん、甘やかしたらあかん。」

でも、節子は、だまって笑っている。かつての私達のように放っておかれないもの。

節子たちの両親は、魚市場の仲買人。朝は3時には家を出て、お昼過ぎに戻って来る。晩は、5時くらいにご飯を食べて、8時には寝てしまう。だから、子ども達と食事をしたり、世話をしたりしている間が無かった。そこで、姉妹の父方の祖母が、世話をしていた。

「母親同士、子ども連れて遊べるの、あんただけや。」

「そんなん、もっとキレイにして入っていったらええねん。うちなんか、阪神間やから．．．あの、事件起こした子のお母さん。何ていったっけ？」

「山口洋子さん。」

「そぞ。デジカメで見せてもった、あの人くらいキレイにしてない

と、人とは、見なされないのよ。」

「怖っ。」

「そこがスタート地点で、お互い容姿、ダンナの職業・収入、住んでるマンションの部屋のクラス、子どもの容姿と出来……」

長谷川百合子は、マンションでも一番クラスの低いAタイプの3LDKで、ダンナが普通のメーカー勤めなので、肩身が狭いのだそうだ。

結婚した頃は、阪神間の高層マンションに住むと言って、地元の公務員と婚約中で、田舎の造成地に住む予定の節子を、軽く見くびっていたが……

「やっぱり、地元でおったほうが、良かったかなあ。買い物したりや、一時間で梅田に出られるし。」

「何を今更……」

「いや、短大やOLの頃は、俄然京阪神に限ると思ってたのよ。でも、子育てとなると。」

「文教地区やん。」

「けど、肝心のお勉強が出来ないとね。それに、小学校から私立に遣ったかて、あのモデルさんみたいな悪い子がいて、いじめ殺されたら何にもなれへん。」

神戸の名門女子一貫校で、今はボランティアにも熱心な某モデルは、同級生をいじめから自殺に追いやった。私立でお金も掛かっているとすると、親もやめさせない。そこが恐ろしいところだ。

「でも、お天道様は、見ているわよ。あの子、最近売れてないやん。」

「ばば臭いなあ。まあ、うちらおばあちゃん子やしな。」

節子と百合子の祖母は、何年か前に亡くなっている。

節子が、公務員の田中吉平と、婚約した事をすごく喜んでくれたのに、結婚式の3ヶ月前の事だった。式を延期しようと、節子は吉平

と話していたが、節子の両親は強行突破した。

節子程度の器量の子が、これを逃したら結婚できないと踏んだからだ。

そう、このように、地味な節子が公務員と婚約したということで、節子より器量のいい娘を持つ親達は、おめでとうのついでに、なんかゆつてくれた。

節子が泣く泣くその事を祖母に言うと、

「あんたが、ええとお嫁に行けるのも、ちゃんとしているところを見てもらえたからやで。」と言われた。

市のバザーに良く、節子はグループで出展していたが、面倒な書類手続きや、お片づけは、みんな節子に振られていた。節子は、器量が悪いので、女どもに見くびられていただけなのだが。それを、職員の中吉平が、「大変そうやなあ．．．」と目に留めたのが、ご縁だった。

「まえの皇后さんかて、学習院の生徒の中で、一人だけあかぎれ作っていたから、見初められたんや。」

香淳皇后が、みんなの嫌がるトイレ掃除を、一人引き受けていた事が、貞明皇后の目に留まり、入内につながった事を聞かしてくれた。まあ、節子とちがって、香淳皇后は京人形のようにかわいらしかったが。

祖母は、皇室おたくで、勤労奉仕に言った際、その貞明皇后にお声をかけてもらった事を自慢していた。また、地域のお寺の行事や、お墓参りに熱心だった。

どこで見聞きしたのか、授産施設に毎月一口ずつ、寄付していた。「障害のある子は、昔から福子とゆつて、大事にしたら家が栄えるのや。」

そついう、祖母に育てられたせいも、2人とも古い事をよく知って

いて、礼儀作法ができていて、勤めてからは、上司にびつくりされるのだが、学生時代はそうもいかない。やはり、目立つせいで、チヤホヤされる百合子は、姉をないがしろにしだした。しかし、お互い子どもが生まれてみると、なんとなく連絡を取り合い、遊ぶようになった。百合子が連絡してくるのも、高層マンションのママ友集団に疲れただけかもしれない。それとも、姉の人格を認めたのか。

「けど、こんな辺鄙なところで、あんな事件が起こるなら、東北のハイソな地域なんか、えげつないのとちやうか？なまじ、京阪神の中途半端なクラスを知ってるから、余計そう思うわ。」百合子子が言う。

「えらいことになったなあ。」

「なんで？」

「東北の方の、子連れバーベキューの集団で、刃物の振り回しあいあったらしいんや。」

吉富佳代子は、行きつけの商店街の青物屋の亭主と店先で話していた。

「今日は、家の事する日やから、CDかけっぱなしで、拭き掃除してたから知らなかった。」

「パソコンで仕事してたんと違うのか？」

「そりゃ、たまには家の事もせんと、えらいことになってまうし。」

締め切り前は、食器は麗華に食器洗い機に入れてもらい、洗濯は溜まったら気づいた者が回し（ドラム式で乾燥まで自動）、床はザラザラなのだ。

「救急車が何台も出てるんやて。もしこの辺で起こったとしたら、

ソツとするわ。」

そう、この辺は、三次医療が可能なのが、いずみ中央市民病院と泉北医療センター、青洲会病院しかない。

同じ内容の事は、教育大付属池田の事件の際も、仕事仲間が言っていた。

「大阪って、南低北高やもんなあ。文化施設から、学校のレベルまで・・・」

「せやけど、この辺はガラが悪い分、異質なものも受け入れるから、山口あゆみちゃん事件のレベルとちがうか？」

「そうやな。あんまり無菌状態で育てると、野菜も子どもも、あかんようになってまうしな。」

宮下恵子は、また、インターネットのニュースを見ながら、クツクツと笑い出した。

「なんや。」

箕面正一が、怪訝な顔をした。

リビングの隅のそれぞれのパソコン。いっしょにご飯の片付けをした後、そこで過ごすのが日課だ。

「品のよろしくないバーベキュー集団あるやん？あそこで、刺し合いやて。」

「いまどき、どんなキレた系のニュース起こっても驚かんわ。」

正一は、恵子を幼児をあやすように相手した。いつでもそうである。遊びに行っても、ベットの中でも。母子家庭とはいえ健常者で恵子からしたら苦労知らずの男にそういわれたくないと思うのだが、障害を克服するため、真面目一方で来た恵子は、術中にはまってしまう。

「でも、死者5名、重体10名、重傷者18名、軽症者・・・」

「飛び道具がないだけマシやな。」

こいつ、ほんま、なんとも思わんらしい・・・

「あたしさ、東北の方の陰険なママ友集団見てるから、さもありなん、やわ。」

「親子なんて、どこでもいつしよやろ。」

「いんや。洛北大学付属病院でも、口唇口蓋裂の患者の会でも、ニュータウンから来た親子はホトホトゆうてたわ。ニュータウンは東北でもどこでもそうよ。」

「はみごにされるの？」

「いんや、そんな甘いもんちゃう。伝染病のキャリア扱い・・・」

「ふーん。そこまで異質なモノを排除する集団やったら、人様とのちよつとした事でも。」

「うん。健常者どうしても摩擦になるわけよ。」

「けど、なんで洛北大学にまで、東北から来るねん。」

「あたしのお世話になった広沢先生も、知り合いのお世話になった妻木先生も、口唇口蓋裂でも言語まで重い障害のある症例を治してきたからよ。」

「おまえ、顔面裂で、言語も殆ど聞き取れないレベルやったそうやからなあ。それが・・・」

「そう、広沢先生のおかげなの。」

山口あゆみは、原稿用紙を目の前にして、考えあぐねていた。小奇麗に完璧にと追い立ててくる、母、山口洋子の躰に慣れていたもので、規則正しい生活くらい、なんでもない。

が、母について書けと？難儀なことになったな。

そのうち、教官が原稿用紙を集めにかかった。

が、山口あゆみのが白紙であるとわかると、後でこちらへ来るよ

うに言われた。

「どうして一行も書けないの？学校の勉強はできたのでしょうか？」

「……。」

「次の畑での作業はいいから、書けるまでここにいなさい。」
「……。」

本当に、困ったことになったな。

教官は、窓越しに少女たちの作業を見ている。

尖らせた鉛筆が余計プレッシャーになる。

やがて、しぶしぶ書き出した。

「あさは、ごはんをたべるまえにせんめんじょへつれていかれて、
チエックされます。かおがむくんでいないかとか、ふきでものがで
きていないかとか。そのあと、かみのけをいたくなるくらい、ブラ
ッシングされてから、えらんだかざりでむすんでもらいます。ママ
は、名越妃美花ちゃんみたいにかおがでかかないから、おさげがに
あうといえます。そのあとたいじゅうとしんちょうをはかられて、
しんちょうのわりにたいじゅうがふえていると、おしりをおもいつ
きりふたれます。いまは、はんそでなので、やけどのきずがめだつ
ので、スプレーストッキングをふきかけられます。いいおいしやさ
んはみつからないと、いつももんくをいわれます。あさごはんは、
パンとサラダとたまごです。ぱんにつけるバターとジャムは決まっ
ただけこざらによそわれていて、すきなだけつけられません。いつも
たりません。サラダも、ノンオイルドレッシングがきまったただけか
かっていて、たりません。かんぺきにカロリーけいさんされている
ので、ふとったりチビだったりしないといえます。」

「がつこうからかえると、ハンドソープとじょきんクリーナーでて
をあらわされてから、てづくりのおやつをくれます。うっているの
がほしいのですが、こうカロリーなので、きんしです。そのあと、

つくえでがつこうのプリントとかチェックされます。ノートがきたないとぶたれます。きょうかしよにもらぐがきはできません。しゅくだいができるまであそびにいかせてくれません。だから、こうえんにいくのはともだちがあそんでいるとちゅうです。でも、わたしはかわいいので、どうとにちようは、ともだちがきてくれるからいいです。」

出来上がってきた作文を読んで、教官は、寒気がした。

どんな性悪な少女でも、親について書かせると、虐待があつたとしても、お祭りに行った事とか、喧嘩で殴った相手にいつしよに謝りに行ってくれたとか、泣かせる事を書くものだ。なのに、されている事実だけを淡々と書くなんて。まるで、メダカの観察記録だ。少女の子どものらしい整った文字だけに、不気味だった。これが流行のサイコパスというものだろうか？

中ノ島の毎朝新聞のムック本担当記者、坂木は考えあぐねていた。新社屋に移る前なので、IT化が進んでスッキリ片付いたオフィスも、再びごたついている。

「ほんまのこと、書いていいいんな。」

書きたい内容は、多発するナイフ振り回し事件についての考察。

「・・・少女Aは、両親と妹の4人暮らし。母親には、勉強だけでなく、生活面も厳しく躾けられた。しかし、この母親。少女Aを出産するときに、夫の実家近くの、セレブ御用達病院で・・・」

この、ゲラ刷りを読んだ、須藤は、言った。

「なんぼ、天下の毎ア力新聞と、言われていても、優性思想に踏み込んだら、ヤバイとちゃう？セレブは、みんなお世話になつてるんやし。」

「そうか。せやけど、新たな問題を告発するのが、ウチの持ち味とちゃうか？」

「じゃあ、おまえんとは、どうだったのよ？」

「うち、かみさんが、のんびりで、氣いついたときは、4ヶ月やった。」

「じゃあ、羊水検査もクソもないな。野良妊婦じゃあるまいし。産ませてくれる病院すら・・・」

「ああ。どこも間に合わなかった。しゃあないから、同級生の産科医に泣きついて、予約入れてもらった。で、医者も、通常出産だけで、人手不足で氣い立ってるから、羊水検査云々言っと、ネチつくやるらしい。あいつも、ボヤいとった。『産ませてもらえるだけでもありがたく思え』」

「結局、地獄の沙汰も力ネ次第ってか？」

「そうだ。95%は、正常なんやし、そこまで気を回すと、かえってドツボにはまるとまとめたい。」

「せやな。商店街のハワイ旅行にすら当たらんしな。」

「そうそう。天皇賞、全部はずした・・・」

「え？一回も面接に来ていない？」

山口洋子担当のソーシャルワーカー磯本悟は、山口あゆみの収容されている少年院に連絡して、声を高ぶらせた。どんないいかげんな親でも、一回は面接に行くというのに。

「あ、はい。わかりました。山口洋子さんのアパートに行ってみます。」

磯本悟は、病院と通所施設の通常業務を終えた後、山口洋子のアパートに向かった。

山口洋子が家族で住んでいた町から、20km。川を越えると、旧国名が変わって、大阪市内になる。26号線を北上しながら、磯本悟は、嫌な予感におそわれる。虐待や自殺未遂が実行されていた・・・その後の現場に向かう時のあの感覚。この仕事をしていると、そ

ういう感覚が身に付いてくる。流行のモンや、友人、女の影響を受けやすい磯本悟は、全身ラジオかケータイ状態。こういう仕事をしていると、感覚が鋭い方がいいので、いいかもしれない。が、疲れやすく、休日は寝てばかりだ。

その、同和地区にある二階建てアパートは、築年数と地域の性で安いの、再出発の負担を考えて手配したものだった。

鉄筋の階段を登ると、案の定、山口洋子はいない。しかたなく、大家さんちに行ってみた。

広々した鉄骨作りの家の庭には、盛りをすぎたケイトウと、これから咲くコスモスが混在していて、車が何台か止まっている。

「すいません。山口さんは、留守ですか？」

「ああ。いつでも朝おそくから出かけてて、午前様みたいや。」

「じゃあ、私の紹介した工場にも行っていない。」

「やるな。別の働き口見つけたんとちがうか？しかし、あんたも大概、面倒見ええな。」

奥からは、夕ご飯の匂いがする。お腹が空いているであろうに、この手広く商売をしている男は、鷹揚に相手をしてくれる。こういう大家さんなら、安心だと思ったのに・・・

「そうですか。それやったら、しかたありません。また見に来ます。何かあったら、教えてください。」

「はいよ。うちは、住民とは、よう話するさかいな。」

同和地区というと、偏見がある人もいるが、中の人は昭和30年代の人情味のある人も多い。

今度は、26号線を下りながら、自宅に向かう。一生懸命になりすぎだと、同僚も医師も保健婦も言うが、この仕事にベストの結果は、稀だからこそ、動くのだと思っている。

「金八先生みたいで、照れるけど、そうせざるを得ないな・・・」

ゴルゴ13みたいにつぶやきながらも、大阪のおばちゃんよろしく、信号待ちでアメちゃんを口に入れた。食いそびれることが多いので、必須アイテムだ。

のぞみ台のある公園では、ママ友のグループが寄っていた。子どもやダンナが出払った後の時刻には、恒例である。

ボスママ、北野和代が切り出す。

「山口洋子さん。ご主人と別居して、夜な夜な大阪市内を遊び歩いてるんやて。」

「ああゆうことなつて、別居になるのはわかるけれど、よう、遊び歩けるわ。」名越育子は、答えた。

そこへ、宝真由子が、「本人は、メイクで気い付かれてないみたい、と思い込んでいるようだけど、アホちゃうか？」と火にガソリンを注いだ。

だが、春山優子が、「で、ソースは？」冷静に質す。

「ダンナの会社の出入り業者が、パブで見たゆうた。」北野和代は、得意げだ。

名越育子は、突っ込む。「んなん、都市伝説っぽいな。酒鬼薔薇の目撃情報といっしょやん。」

ちよい、気まずい雰囲気になったので、宝真由子は、話題を変えた。

「それより怖いのは、山口あゆみちゃんの出所情報やわ。」

「大丈夫。違う地域に移すから。ああゆうのは。」春山優子が、答えた。

「でも、木村薫ちゃんへの謝罪にも行かなあかんし、木を隠すのは森やというし・・・」北野和代は、つぶやく。

「案外近くに来るかもな。」と宝真由子。

「怖っ。で、木村薫ちゃんも失踪中、悪い遊び覚えたとか。」名越

育子は、目を爛々とさせたが。

北野和代が、抑える。「シッ！」

木村みどりが通り過ぎた。

一同は、目礼したあと、木村みどりが見えなくなると、話を続けた。

「しってるー。人気のない町内キャンプ施設で、通りすがりの二トくんとHしたとか。」と春山優子。

宝真由子は、「でも、三年生でそんな事・・・と目をしばたかせる。

名越育子は、あきれたように、「最近の子は、そんなことぐらい知ってるわよ・・・」と、しれつとした。

山口一郎の関東の実家では、親の山口二郎と涼子が20畳のダイニングで向き合っていた。

テーブルの上はチリ一つなく、食器棚は別注させたものに、ジノリなどのブランド物のみ、整然と並んでいる。この夫婦の一流趣味と、余計なものは一切排除するスタンスのように。

「身元調査は、十分したんだよな。」

「ええ。古くからある事務所でも、ベテランに・・・」

「調査漏れという事ないのか？テキストに卒業名簿なんか繰って、埋め合わせして、足で稼がめという・・・関西は、同和とか在日が多いから、どこかでつながりがあるとか。6親等以内に障害児がいるとか？」

「いいえ！見せてもらった写真は、元村さんところの実家や、ご近所どおりでしたわ。」

「関西は、同和とか在日を除けば、むしろ人情味あるからいいと踏んだのに！洋子は、こういう教育をしていたんだ！」

二郎は、身元調査なぞする自分達の薄情さを棚に上げてまくしたてた。

「私は、少しツンとしたところのある娘さんだといいましたが、あなたは『今時古風ないい感じ。』といったじゃありませんか。」

「だから、余計失望だ！お産の手配までしてやったのに！」

涼子は、もうオロオロしてしまつて、サイドボードから、ブランドーを出した。

上には、孫のあゆみと緋那がきたとき、いつしよに写った写真がある。

「で、一郎が離婚の片付けが済むと戻ってくるらしいの。」

「なに！自己責任であんな腐ったメス豚を選んでおいてか？！」

「でも、会社も辞めたし、住むところもないし。慰謝料はあんな人のは、踏み倒せばいいですけど。」

「情けない男だな。」

「で、あなたが恥と思うんでしたら、節税対策に借りた都心のマンションにとりあえず、住まわせて・・・。」

夫婦は、初孫が五体満足でかわいらしく生まれてきたときの喜びも忘れて、善後策を詰めていった。

「何？脱走した？」

警察病院から連絡を受けて、教官のは、思考が止まった。

先日から、山口あゆみがしつこく頭痛を訴えるので、監察官付きで医師に掛からせたのに。

裏切られたくやしさと、これは始末書では済まんと言う思いで、何をしたらいいかわからなくなってくる。

「ともかく、全国手配しましょう。話はそれからです！」

国营放送は、臨時ニュースを伝えた。

「お伝えします。大阪のぞみ台小学校の児童傷害事件の加害少女が脱走しました．．．」

「え！あゆみちゃんか？」

田んぼから家に入ってきて、遅めのお昼ごはんのお供にテレビを付けた田村奈津子は、仰天した。あゆみちゃんの本名から写真まではネットで流出しているが、そのリアルな姿まで知る奈津子は、目をむいた。

「あら、まあ、まろちゃん。こわばったお顔をして。」

この臨時ニュースを伝える、国营放送の小坂アウンサーは、ちなみに整ったお公家さん顔ゆえ、まろと呼ばれている。女子どもには人気だ。

奈津子は、お弁当の取り分けをつまみながらも、だんだん心配になってきた。

「監禁王子みたいな、悪い子に捕まってなければいいけど。」

この地域はまだ、子どもを地域全体で見ているというとする、気遣いが生きている。

なんぼ、ひどい事した女の子とはいえ、奈津子のような子を持つ親は、みんな心配しているに違いない。

同じころ、宮下恵子は、勤め先の休憩室でお弁当を食べていた。

「加害少女のお母さんと、宮下さん、友達なんですよ？」

看護師は、また面白い情報を引き出そうと声をかけた。言語療法士などパラメディカルは同じ部屋で休憩する。

「たまたま近所で、同じクラスだっただけ。随分いやな思いさせられたわ。」

一応、医療職として、知りえた情報は言っではならないが、プライベートでなおかつ恨み骨髓の人間に対しては例外だ。

「どんな？」

「私達がお世話をしているお子さんが言うとおりの事よ。目を泳がせてるふりして、何気なく口元を見ってくる。そのくせ、一緒に遊ぼうとしない。」

「ひどいなあ。でも、あなた、大阪南部はある程度どんな子でも受け入れる気質やゆったけど。えげつないのは、どこでもあるものねえ。」

「それでも、なまぬるい差別はあったよ。ハイソサエティーの問答無用の差別とは、別格だけど。」

宮下恵子は、うちが、口蓋裂の手術が進んでへんときやったら、コイツ、相手してくれへんタイプの女やな。

と、なまぬるくオチしながら、相手をしてやりながら、思い出した。

宮下恵子は、だんじりを曳いていた頃の事を思い出した。

同じ集落の子ども達には、受け入れられたり、ハブられたりしてきたが、だんじりとなると、話は別である。

一緒になって、綱を曳いている。

彼らが、「大人になった」と思うのは、駅前パレードに参加できる事だ。

「やりまわし」といって、直角に曲がるポイントが幾つかあり、猛スピードで曲がり角に突っ込んで、巧みに切り返す。だから、ある程度、機敏に走れないと、中学生でも、どくよう言われる。

恵子は、口蓋裂を引け目に思う両親に、閉じ込められて育ったので、保育園は年長さんしかいない。

運動の、基礎能力ができる就学前に、地域の子ども達と走り回る経験が、ある部分ゴソツと抜け落ちている。

だから、高校になって、だんじりを曳くのをやめるのだが、終には駅前パレードに参加することは、なかった。

ただ、ありがたいと思うのは、コケた時に、必ず起こしてくれる事だ。

品のよろしくないママ集団は、子どもがコケても、起こしてあげることなんかないだろう。むしろ、それを喜んでいる。

「はん！大人なんてアホやわ！」

病院から脱走した山口あゆみは、繁華街を歩いていた。

警察病院なので、トイレの窓にも鉄格子が多いが、そのトイレは尿検査提出用に、検査室とつながっていた。

「尿コップ置いておきますね。」

と言うと、技師さんは、確認もせず、セカセカと作業をしている。

その際に、検査室の通用口から、飛び出したのだ。

歩いていると、青白いオタク風の青年が声を掛けてきた。

「ね？学校は？」

いつもなら、キャーとか言って逃げるのだが、今はどうなってもいい。

「休み。」

すると、青年は山口あゆみの手を引いて、繁華街のはずれまで、連れて行った。良く見ると同じオタクでも、こざっぱりした感じ。ただ、油質らしく、握った手がベタベタするのがかなわん、と思う。そこには、外車が泊まっていた。

青年は、山口あゆみを乗せると、メイン通りに出た。

「どこ行くの？」

「ええところ。」

外車は大阪市内を通り抜け、郊外に出ていた。山や田んぼが広がっている。

「なんで、わたしを連れてきたん？」

「かわいいから。」

日頃、知らない人には付いていつてはいけないと言われているが、木村薫を刺した瞬間から、山口あゆみの何かがはじけ飛んでいた。車の中は、キレイで、足元はピタリビニールに覆われている。

「買った時のビニール剥がしてへんの？」

「いや。張ったの。汚したくないから。」

外車は舗装された登山ルートに入って行き、途中の小道から、さらに脇へ入った。

入ったところは、山の尾根のしたが、みんな個人の敷地になっているようだった。

のぞみ台小学校の2倍はあろうか。

手入れされた木々の中に、瀟洒な鉄骨の建物が幾つか建っていて、その中の一つに連れて行かれた。

大きな建売くらいは、ある。

上がると、人気のないダイニングに通された。グレーで統一されている。

上質な家具類があるが、冷え冷えしている。

「何飲む？」

「炭酸。」

いつも、ママの山口洋子から、

「炭酸は、美奈ちゃんみたいなおデブになる。」と、禁じられていた

から。

あゆみは、本当に、出されたペットボトルを美味しそうに飲んだ。

「お腹空かない？」

「空いた。」

「何がいい？」

「ピザ。」

これも、太るからと禁じられているものだ。

こんな、チヨイ奥地まで、ピザ屋のバイクが来た。

食べた後、ソファでまどろみながら聞いた。

「太らないの？」

山口あゆみは、常にママの山口洋子から、朝夕体重チェックを受けていた。

「ええもんある。」

青年は、錠剤を取り出した。

「何？」

「痩せる薬。」

山口あゆみは、歓声を上げて、飛びついた。

「コラ！麗華！」

30畳のリビングの隅には、ビリヤード台があった。

しかし、吉富麗華は、カラフルな玉で遊びだした。

父親の光孝が制するが、子犬のようにじゃれついて、わたさない。

ボードゲームでも、玉玉のついたものがあるが、麗華は、玉で遊び、肝心のゲームはしない。

佳代子が、「お風呂入ってしまいなさい。」と言つまで、麗華は

カラフルな玉で遊び続けた。

ようやく、光孝は、本来のビリヤードを始めた。学生時代、おしゃれなバーなんかであつて、それを思い出して、ヤフーオークション

で、なんと5000円で落札した。

佳代子に、「また、邪魔になるもの買って．．．」とぼやかれるが、飽きればまたヤフオクに出すので、問題ない。

「ほんと、パチンコみたいに、玉は制御できないのね。」

「ああ、できそうで、できない。」

「ある意味、ゴルフより大変かもね。」

「うん。でもそれがいい。」

「はん。わかった．．．」

「?!」

佳代子は、いつもイラストのネタを探して歩いているので、なんでも連想しちゃうのだ。思いついたのは、人間関係の事。

確かに、玉を突けば、転がる。が、どこにどうぶつかって、どう転がるかは制御できないのだ。

人間同士でも、アクションを起こせば、反応はある。

しかし、どう転がっていくかは、極言すれば、ビリヤードみたいなものかもしれない。

あの事件でも、子供同士の小競り合いで済むところが、山口あゆみがカッターを出したからややこしくなったと聞く。

直接の原因は、山口あゆみの性格や山口洋子の育て方だろう。しかし、ユングが言うように、個人の無意識というものはつながっている、複雑なのだ。ビリヤードの玉の動きのように。

人々が共感する歌などがあるのは、そのためだ。

共感 普遍的無意識なのだ。

普遍的無意識がなければ、美空ひばりもSMAPもいなかっただろう。

テレパシーとか、呪い、恋愛のおまじないなんかも、このつながっている個人の無意識に、働きかけるといふものなんだろう。

でも、最後の一步は、山口あゆみがカッターを出すか出さないかだ。これを押す、何かって？

わたしも最後の一押しが、出てこない。新しいキャラクター考える

といってもなあ。

ビリヤードの玉の動きを見ながら、考えあぐねた。

光孝は、佳代子がいることも忘れたように、ビリヤードに夢中になっている。この人は、職業柄、オタクなのめりこみ方をする。そう、プログラマーなので。知り合った頃は、大手IT産業に勤め、高給取りだった。建築家に依頼した鉄骨の家もキャッシュで買った。しかし、5回血を吐き、3回胃カメラを吞んで会社を辞めてしまった。大手風を吹かすクライアントの要求に太刀打ちできないものらしい。たいていのプログラマーは。だから、今はフリーで、ITは丸投げの中小企業の社長さんやパソコンの設定すらできない個人の仕事を請けている。ド素人は、なんもしらずに任せてくれるから、気楽なもんだ。大手クライアントのように知ったかぶった要求もしない。気楽だが、収入は銀行員並みだ。

ビリヤードの玉が勢いあまって飛び、i p o t にあたり、S M A P の世界で一つだけの花がかかる。

♪世界で一つだけの花、その花を咲かせるために一生懸命になればいい♪

そうだ。ユングの普遍的無意識だ。人々の意識は、別々に見えてバラバラ。

バラバラなのが、個性なのだ。

だから、普遍的無意識をいい風に取り込めば、普遍的に流行るキラになるし、

悪い方に取り入れれば、停滞した世の中の悪しき事が流れ込み、自殺やナイフ振り回しになる。

麗華が言うところによると、山口あゆみと山口洋子の親子は、人から見てどう見えるか？のみに血道をあげる種類の人間だったらしい。「山口あゆみちゃんは、かわいいけど、しゃべってもおもしろくないね

ん。」

「うちの学校、私服やけど、流行っているかが着こなしのポイント。参観に来たあゆみちゃんのママもこんな感じ。ほかのおばちゃん服装のチェックジロジロしていた。」

「何か見に行った、デイズニールオンアイスを、別のグループで報告してるけど、雑誌に載っていたレビューのほうがおもしろいねん。」
まあ、大阪の事なので、おもしろい至上主義をさっぴいても、なんとなくわかる。深み、個性、もののあわれのないと言う意味で、おもしろない、なんだろう。

バラバラな、個性が、停滞した世の中の悪しき事が流れ込むのを、防ぐのではないのだろうか？

ウィルスソフトのように。

しかし、山口あゆみと山口洋子の親子のように、世界で一つだけの花 バラバラの個性が、ないと普遍的無意識にリンクして、停滞した世の中の悪しき事が流れ込むのだ。

正覚寺の住職、早瀬一徳は、朝のお勤めが終わって、朝食を摂っていた。僧職だが、修行を終えた後は、トーストにハムエッグ。菜食はどこへやら。多くのお坊さんは、そうだ。

子ども達は、学校に出た後だ。

新聞を広げると、応援しているマラソンランナーが、新記録を更新した事が出ていた。

「悟りも同じかもしれぬ。」

一徳は、修行時代を思い出した。

所属している宗派は、曹洞宗。日本で一番修行がきびしい。

普通に修行と言うと、座禅を組んだり、お経を上げたりということ、を、思い浮かべるだろう。

曹洞宗の場合、そこへ食事（粥座・斉座・薬石）、風呂（開浴）、トイレ（雪隠）など、あらゆる日常生活の作法が加わる。

宗門の大学をでたばかりの一徳には、「なんの根拠があるの?!」と感じられたが、修行を続けるうちに、わかつてきたことがあった。これらは、みんな悟りのためのアプローチなのだ。そうして、曹洞宗のやりかたで悟ろうとすると、このプロセスは、どれも抜かしてはいけないのだと。そうして、浄土真宗や真言宗では、また、悟りに到達する、過程がちがうのだろうと。

その後、修行が進んで、悟りかと思われた事があった。

ただ、本山から自坊に帰ってみると、現役の父親の手伝いから、晋山式（新しく住職・副住職が就任するときのお式）、境内の整備、葬儀業者や石材屋との交渉・・・

と、結構俗世にまみれた生活が待っていた。あの悟りの感覚を忘れるくらい。

そんな中で、お経を上げたりしているときに、あの感覚を、フツと思ひ出す。

悟りは、ふいにやって来る。風呂場で悟りを開いた跋陀婆羅菩薩、掃除中に悟りを開いた、周利槃特がおられると言っが、まさに時を選ばずやってくる。

あの、のぞみ台小学校の事件も、ふいにやって来るような出来事ではなからうか？

そして、そんな悪しき来訪者をブロックするのが、我々宗教家の役目ではなからうか？

ただ、日本のお寺は、葬式仏教と陰口を叩かれているが如く、葬儀・法事・諸行事に忙殺されていて、なかなかそこまで手が回らない。

お寺の配置も、山から、一直線に結界を作っている。法華経も和泉山脈に一部ずつ、ポイントごとに納経されていて、結界を作っている。

一人連想していると、妻が、集落の正佐五門（屋号）の、三吉さん

が亡くなったと知らせてきた。

島田先生は、出席を取ると、木村薫ちゃんが休みのことがわかった。教室に入ってきて、誰か足りないなあ、と言う雰囲気はあったけれど。

「木村薫ちゃん、お休みですね。おうちから、連絡はありません。」
島田先生が言うと、クラスでも華やかな感じの女子が、何人かニヤニヤしている。

「たたく、女の子は小学生でも変ないやしがあるんだから。」

「ニヤついてないで、言いたい事があればいいなさい。」
すると、一人がこういった。

「あんな事して。出て来れないわよ。」

すると、他の女子も、顔を見合わせている。

「具体的に、ちゃんといいなさい。」

「はい。木村薫ちゃんは、家出中に、ニートのお兄さんとエッチしたんです。」

すると、男子までが、甲高い叫び声を出して騒ぎ出した。

「静かに！あなた自身が木村薫ちゃんがそうしている所を見たのですか？」

「いいえ、でも、お母さんも、お父さんもバーバも言うもの。」

これだ、と、島田先生は、思った。

子ども自身は、明るい子も、静かな子も、乱暴な子もいて、多種多様でそれでいい。

しかし、その子達を育てる親や祖父母達が、余計な事を吹き込んで楽しむのだ。

おのれの、思い通りにならぬ生活のうつぶんを晴らすために。

昔から、そんな傾向はあるが、まだ、「子どもに言っではいけない事。」という雰囲気があったのに。

「いくら、周りの人がどう言おうと、その目で見た事でない事を、
本当の事のように言っではいけません。」

島田先生は、そうして、朝の会を何とか収めると、国語の授業に入
った。

職員室に帰ってから、島田先生は、今日の出来事を、学年主任の岩
下先生に相談した。

「木村薫ちゃんの、お母さんからも連絡がないと・・・難しい事にな
ったね。」

岩下先生は、黙り込んでから、3分後に切り出した。

「あの事件の時も、保護者に集まってもらいましたが、またそうし
ますか。」

終わりの会で、島田先生は、緊急の保護者会のプリントを配ってか
ら、こう指示した。

「木村薫ちゃんの今日の連絡物や宿題は、吉富麗華ちゃんに持って
いってもらいます。」

すると、男子どもがヒュー！と叫びだした。

「3年3組、リーサルウェポン！」

映画で見た、ヒーローのように、はやしたてた。

先日、あの邪険な父親の残る山口あゆみ宅に学校に置いてあった物
を届けた事もあるからだ。

しかも、木村薫が登校するように説得する任務も負わせられている
事位、察しがつく。

「静かに！」

吉富麗華は、友達と別れた後、木村薫のうちに向かった。

「ほんまに、麗子像だの、リーサルウェポンだの、勝手な事抜かし

やがって。」

と、思いつつ、呼び鈴を押した。

「3年3組の吉富麗華です。」

モニターから、母親の声がした。

なんだか、すぐく警戒しているのが、ビシビシ伝わってきた。

だが、しばらくすると、出てきた。

けっこう、キレイなおばさんだ。

「木村薫ちゃんの、今日の宿題と連絡物です。」

「ありがとうございます。」

「薫ちゃん、具合はどうなの？」

「まだ、おなかが痛いと言うの。」

「そうなの。早く治るといいね。先生もクラスのみんなも心配しているよ。」

「ええ。すぐ治ると思うけど・・・。」

でも、麗華には、わかった。

薫ちゃんは、二度と学校に来る事はないと。

山口あゆみちゃんのお父さんとは違って、邪険にはしないけれど。

山口あゆみちゃんが、二度と学校に来る事はないように。

うちに入ったあと、木村みどりは、やれやれと息をついた。

みんな、吉富麗華ちゃんのような、女子特有のいやらしさが無いのなら、薫も不登校を起こさずに済んだのに。おなかが痛いと言うのはうそで、本当は学校に行きたくないのだ。

また、いやらしい女子を育てるような、親ばかりだから・・・

そう思っていると、

「生協です。」

と、玄関で声がする。

あの事件以来、買い物に出ても、ママ友に会うと、ものすごく気ま

ずいような雰囲気になるので、買い物には行っていない。生協は、若干高いけどしょうがない。

以前は、スーパーを2件まわって、安い方のものを購入するのも楽しみだったのに。

のぞみ台の公園では、そろそろ日も傾きかけているのに、ママ友が寄っていた。

「何、また保護者会やて。わがのおも管理でけへん親のフォローかいな。」

ボスママ、北野和代が言うと、一同は苦虫をつぶしたように笑った。

「まあ、薫ちゃんが悪さしてるしてないは別として、みそぎやな。」

春山優子は、したり顔だ。

「でも、そんな事したところで、うわさは消えないし。」

名越育子は、吐き捨てる。

「わが等の方が、不登校教室でもフリースクールでも行ったらええんや。」

と宝真由子。

だが、名越育子は、否定する。

「子どもを地域で育てる、がお題目なもの。」

「シッ!」

北野和代が、見張りのメス猿のように制した。

見ると、吉富麗華が、ターコイズブルーのランドセルを背負って、歩いている。

宝真由子は、猫なげ声で言った。

「今日も、木村薫ちゃんどこ? お疲れ様。」

吉富麗華は、わざと田舎の言葉を知らない、少年のようにうなずくと、スタスタ走り去った。

吉富麗華が、去った後、一同はまた話をぶり返した。

「あの子も大変やな。来るはずもない子の面倒押し付けられて。」
名越育子は、自分の子といっしょになって、「麗子像」と言っていた事も忘れて、つぶやいた。

吉富麗華がうちに帰ると、さっそく陰険なママ友について言った。

「あのうんこ製造機が、木村薫ちゃんを脅にしていた。せやから、うちがなんぼ通ってもあかん。」

「そうやな。ああゆう人らがいるからな。でも、うんこ製造機はネツトの見すぎ。」

30畳のリビングに下りてきた吉富佳代子は話を聞いていた。
父親には見捨てられて育ったので、ともかく、わが子の話は聞いてやりたい。

「なんとかできへん？告発とか。」

「むりでしょ。数が多いし、学校側は、親を尊重しないといけないし。」

「じゃあ、粛清ね。スターリン閣下！」

「あんた、粛清つ漢字で書けるの？！」

「うっん。ニンテンドーDSのソフト買ってよ。」

そう、今の子は、お勉強ソフトは事欠かないのだ。

心を育てるものはないのに。

田中節子は、「引き寄せの法則」なる本を読んでいた。

朝ごはんの用意をして、洗濯し、吉平を送り出し、保育園に敬子を自転車ですてからが、
寛ぎタイムだ。

20畳のリビングダイニングは、キレイに片付けられている。

気に入ったアールグレイと、いただきもののショートブレッドを用意している。

まだまだ、幼稚園に通わせられる程スノップでないにしろ、保育園でも、ママ友特有のいやらしさがあって、そこから逃げてきた後味の悪さが残っている。

せっかく、お茶を味わおうとしているのに。

まあ、保育園は幼稚園とちがって、パートをしないと食べていけない家庭が多いので、溜まっている暇なく、子どもを預けて出て行くくらいいけど。

後味の悪さを打ち消すように、田中節子は、アールグレイが冷めるのも構わず、本を読み出した。

そこには、無意識があらゆるものを引き寄せるとあった。

「でも、その無意識をコントロールする術があったら、世話ないんだけどなあ。」

わりといい家庭を引き寄せたが、つきあう女たちは、まともなのを引き寄せていない。

と、思いつつ、節子は、やっと、ショートブレッドに手をつけた。

「あの、山口あゆみちゃん的事件もそうなのかな。教育大付属池田の被害児童のお母さんが、経歴詐称の宅間とセレブ合コンで会っていたらしいけど・・・」

紅茶も空になり、二杯目が欲しいところだが、読み続ける。

「この本の書いてあるとおりやったら、間違った想念は、とんでもないものを引き寄せるのだな。いくら努力しても。山口洋子さんは、あんなきちんとした家庭だったんだけど。」

学校を休んだ木村薫は、あの保護された正覚寺にきていた。

街中に出ると、イヤな同級生のオバハンに遭遇するし、かといって、籠っているのも、息が詰まりそうだ。

薫の脱走に懲りた親が、GPS機能付きケータイを持たせているので、安心だ。

ダラダラした上り坂を上り詰めると、お寺だ。

声を掛けると、住職が出てきた。

「ああ、元気にしとったか？」

住職は、「学校は？」と、何回これまで聞いたかわからないセリフは、言わなかった。

本堂で、阿弥陀如来に手を合わせてから、奥さんが淹れてくれたお茶と和菓子をいただいた。

「住職は、どうして、お坊さんになったの？」

「うちが寺やったから。」

それから、お寺での行事の事、通っていた宗門の大学の事、本山の永平寺の事などを話してくれた。

難しい事はよくわからなかったが、「あたりまえの事をあたりまえにやる。」という言葉だけが、耳に残った。

磯本悟は、何度目かの山口洋子の自宅の訪問で、やっと本人に会えた。

大家さんが、9時か10時頃出るというので、勤めている病院に訳をお話して、来たのだ。

「あのう。お話があつて・・・」

完璧に化粧し、男からあてがわれたブランド物を着て、古びたアパートとはチグハグな洋子は、答えた。

「生活には困つてませんから、ご心配なく。」

「いえ、あの、あゆみちゃんの面会には・・・」

「もうあの子に関係ないんです。私の生活や人生を狂わせて！」

「でも、母親でしょう？」

「母親として、完璧にしたのに、あの子は！だから、あの子が変わなんです！」

と、ヒステリックにまくしたてると、鉄骨の階段を駆け下り、去っ

ていった。

磯本悟は、かつて、キャバクラ嬢を口説いた事があったが、誤って彼女のテリトリー以外の事を言うと、ヒステリックにかわされた。あんな感じ。華やかな、しかし、空虚な女がムキになるあの感じ。あああ。またやつちやつたよ。

どうせ、住所も変えられちゃうんだろな・・・

そそくさと、車に乗り込み、発進させる。

すぐ先の大家さんちは、ケイトウが枯れ、寒菊が勢いづいている。そろそろ、男でもスーツの上着が暑くない頃だ。

でもなんで、クールビスとゆうても、上着着るのや。開襟シャツでええ。腹回りが気になるのなら、おなごみたいなおバーブラウス開発せい！コイノミホコよ。磯本悟は、同郷で同窓のデザイナーにぼやいた。

つたく、寒冷な英国の猿真似する外見至上主義社会の性だ。病院勤務でよかった。

いつのまにか車は26号線に乗り、あと2つ信号を過ぎれば、勤め先の病院だ。

そのとき、カーラジオの速報のピンポンが鳴った。

「今日午後1時頃、東北大学付属病院の形成外科病棟で、30代の女性が入院患者や付き添いの家族を刺し、死傷者が出ているようです。」

またかよ。最近こっというのがブーム？

ホコ天のチンケなパフォーマンスにでもしといってくれよ。

形成外科医、広沢芳樹は、学会で興成大学付属病院にきていた。広いロタリーでタクシーを降り、お目当ての記念ホールを探した。しかし、なんだか物物しく、病院の玄関とか、あらゆる建物に黄色いテープが張られている。警察車両も何台か。

「広沢先生、学会は中止です。」

興成大学の若い医師、細川が、背広姿で駆けてきた。

「なにが起こったんだ?!」

「患児の母親が暴れました．．．」

細川は、青白い顔をさらに紙のように白くして、息を切らせて、一言だけ告げた。

広沢芳樹は、そのとき、ある光景が浮かんだ。

手術を終えて、夕刻、病棟を診に来たときだ。

もう、ナースステーションが見えた頃から、聞き覚えのあるすさまじい泣き声が響いていた。広沢は、患者の幼い子には、よく泣かれる。だから、慣れているが、つんざくような．．．宮下恵子か？

看護師が近寄ってきた。

「あのう。宮下恵子ちゃんが別の親子とモメまして．．．」

なんでも、重症の宮下恵子が、軽症の親子に、「わたしらは、もう退院するもんねー。」的な事を言われたらしい。

やれやれ、と思いながら、個室に向かった。

宮下恵子の親は、他の軽症の親子にひどい目にあわされるので、高いけど個室に隔離している。

「どうした？」

「あいつら殺したる!」

「これ、そんな物騒な事いうもんやない。」

と、言いつつ、広沢は、どうも言えない。

メスさばきはあざやかとはいえ、こういうメンタルな問題は苦手だ。やっとの思いで、看護師に鎮静剤の静注を持ってくるように言いつけ、宮下恵子の涙と鼻水をぬぐいながら、傷のガーゼをはずしかかった。

宮下恵子は、帰ってもごはんの用意もせず、冷蔵庫から、ビールだ

のワインなど開け散らかして、飲みながら、ケタケタ笑っていた。帰ってきた、箕面正一は、勤めている施設で、事件の事は聞いていたので、帰ったら恵子がシラフでないことぐらい、予想していた。「アーハッハ！ついに来ましたかあ。あたしわー暴れたくても暴れられなかったけどおー代わりに暴れてくれたんやねーケケケケケ」恵子の心の傷については、知っているつもりでも、ここまで壊れているのを見るのは初めてだ。

正一は、さらに、ビールのカートンを開けるしかなかった。

「そんな泡の出る麦茶なんか、いりませえーん！」

ということなので、1.8リットル紙パックの鬼殺しを出した。

これを恵子は、マグカップに注ぐと、一気に飲み干した。

正一は、ごはんができていないので、冷凍室のラップの冷ごはんを佃煮を出した。

「ちよつとでもおー人と違うとおー人間扱いされましょーん！それくらい、人間なんて、悪意の塊ですうーケケケケケだからあーだれかがあー代表になって、暴れてくれるのですうー」

正一は、判った気がした。もともと、人間は、悪意の塊なのだ。いや、そういう面がある。健常者でも母子家庭ゆえ、そういう悪意には、慣れてきたつもりだが、やっとわかった。

最近多発する、ナイフの振り回しは、何らかのそういう素地に、火が付くだけのことなのだ。

山口一郎は、節税対策に両親の借りたマンションに引っ越していた。1LDKで、まあまあ収入のある単身者用だ。

水周りもゆつたりしている。

離婚手続きが済んで、親権を破棄し、緋那を養護施設に入れて。

ほんとうに、山口洋子も、あちらの両親も使い物にならないので、大変だった。

かわいかったが、あゆみは映画リングの貞子のような、化け物に感じられて、厄介払いができたと思っている。

緋那は、かわいい盛りだが、あのあゆみを育てた洋子の子だ。いつ牙を剥くかわからない。それで、泣く泣く手放した。

しかし、なんであんなことになったんだろう？

一流大学に入って、大手メーカーに入り、同期でも出世も早くて、そうこう考えるうちに、出勤時間になった。

これも両親のツテで、別のマンションの管理人の仕事をもたらしている。

定年後の人間がやるような仕事より、転職先を必死で探すこともできたが、一部面が割れているし、探す気力もなかった。かといって、起業できるスキルもない。

グレーで統一され、キレイだが無機質なリビングで、山口あゆみは、動かなくなっていた。

DVDを見るのもゲームも好きなだけやれ、コンビニのデザートやファーストフードは食べ放題。

みんなさらってきた男が、運んでくれる。アメリカ製のダイエットの錠剤のおかげで太る事はない。

いちいち、管理されていた、ママ、山口洋子の事を思い出す事なんてない。

ただ、ふいに、体のあちこちを触られるのが、かなわんかった。

また、いつものように、男は、あゆみに触れて、ギクツとなった。冷たい。

息もしていない。

見ると、テーブルの上のアメリカ製のダイエットの錠剤が、全部空になっっていた。

まずいよ。

男は、かわいいペットが急に面倒なものになったので、慌てた。

元村彰治朗が会社から帰ってみると、相変わらずテレビは、つけっぱなしだ。

トドのような嵩だった弥生は、急にしぼんで、相変わらずソファに寝転んで、テレビを見るともなく見ているハズだが、
気配がない。

「つけっぱなしにして、ほんまに。」

だが、次の瞬間、彰治朗は、フリーズした。

弥生は、息がなくて、倒れているのだった。

いくら、無能な妻で、こいつのために働いてやっているんだと思っ
ていても、彰治朗は、足元がなんだか、崩れるような感じがした。

木村薫は、田村奈津子の畑を通りかかった。

朝6時くらい。

学校へ行っていないゆえ、人目が気になるので、完全夜型。

夜じゅう起きていて、寝る前の徘徊だ。

フード付きの帽子をかぶったおばさんが、大根を抜いている。

「早いなあ。」

田村奈津子が、のんびり、声をかけた。

「うん。」

「ああ、これは規格外や。もってき。」

と、木村薫に大根を押し付けた。

「うん。ありがとう。キカクガイ？」

このおばちゃんは、学校は？とか、聞かへんのや。

「大きさ揃ってへんと、農協に出されへん。」

そのあと、田村奈津子と木村薫は、なんでもない事を話して、わかれた。

「キカクガイ」

という、言葉が、木村薫を咎めたてる言葉に聞こえつつも、大根をかかえて、うちへ向かった。

ママ友集団は、相変わらず寄っている。

「それはそうと、春山さん、顔色悪いで。」

「貧血でね、まあ女の人に良くある事だし。」

しかし春山優子の顔は、青黒く頬骨が尖っていた。宝真由子は癌で亡くなった姉そっくりだと思った。

「わたし、引越すの。」北野和代が言った。

「なんで。」みんなが口々に聞く。

「ちよつとね。」

「どこに？」

「住所がはつきりわかったら・・・」

でも、そういう反応を返す女は、離婚にほぼ決まっている。女ってのは、見栄っ張りだから、自分の結婚が失敗だったなんて、ママ友には言いたくないのだ。

毎週の文化教室で、田中節子は、ビーズをつなげていた。

日常も、人生も、ビーズをつなげるものかもしれない。

山口洋子がいらない寂しさにも慣れた。

先生が、脱線した話をする。

「私は、とにかく透明な物が好きでね。でも水晶玉で怖い思いをしたのよ。窓からの光がレンズ効果で集められて、カーペットが焦げたの。」

そつだ、と節子は思つた。なんらかの原因で、ママ友なんかの悪意が集約されて、子どもの事件になるのだわ。

田中節子は、また、山口洋子の取り巻きが、若年性癌や離婚に見舞われているのを聞いている。これもまた、ママ友の陰険さが、レンズ効果のように増幅して、本人やそこにいる人に、牙を剥いたのだと思われる。更に人の弱みが大好きなタイプのママ友は、常に負の部分を意識しているので、悪い事をラジオのチューナーを合わせるように引き寄せてしまう。よく、失敗すると、ビクビクしながらやつていると失敗するように。それはお菓子作りから入試まで変わらない。

名越育子は、朝遅くの家族を送り出したママ友の井戸端会議から、帰つてきて、清めの盛り塩を換えた。

先日、激安シヨップ呂甚で、10袋2000円の赤穂の塩を仕入れたばかりなので、しばらくある。

最近ママ友集団が次々に不幸に見舞われているのが恐ろしかった。ママ友集団も、駅前のシャッター商店街のように、欠けてきている。次は自分とこか???

郵便物を整理していると、献血のご案内。

高校のとき以来、体調がいいとき、200mlがしている。また、行こう。

で、ひらめいた。

最近流行の、恰幅のいい拝み屋と、金髪のゲイが言うには、

「お布施は厄除けになるのです。」と。

そつだ。私は、貧乏だから、募金なんて100円しかできないけれど、

献血もお布施なんだよね。

それかなあ。

ふと、テレビをつけると、ワイドショーが終わり、医療番組をしている時間だ。

いきなり、妃美花そっくりの出っ歯の症例写真が飛び込んできた。

「この場合、骨格性不正咬合といまして、装置をつけるだけの、通常の歯列矯正だけでは治療できません。」

数えの本厄のダンナと、同年輩らしき、ひげを生やした医師が説明していた。

「．．．といいますと、費用の方はどれくらいかかるのでしょうか？」

「一概に言えませんが、育成医療制度を利用すると、後で費用の返還がある場合もあります。」

名越育子は、あわてて、書くものを探して、転がっていた領収書に書いた。

「大阪市民病院、竹田良彦先生、と．．．」

「なんや隣で、変な臭いするんや。」

一人暮らしのバツ1男、が、大家さんちに駆け込んできた。

大家さんは、合鍵を持って、アパートに向かった。

いつぞや、親戚の葬儀屋に手伝いに行った時の、しばらく発見されなかった、ほとけさんの臭い。

きったはったの商売もしている大家さんですら、一呼吸おいてから、鍵を回した。

開けると、住民の山口洋子が倒れていた。

シャネルっぽい部屋着。

臭いの元はこれか？

素人が見ても、明らかに死骸．．．

顔を覗くと、図太い神経の大家さんですら、後づさった。

整形女優ですら、かなわない美貌は、無数の腫瘍に覆われていた。バツ1男は、真っ青になってつぶやいた。

「こんな、夏場やったらもつと、えらいことやで・・・」

「110番と、うちの社員と・・・」

大家さんは、携帯を取り出す。

便利屋のような商売と、不動産屋を経営しているのだ。

便利屋と言っても、事件のあった家の後始末から、法律上のトラブル、産業廃棄物の処理まで、マニアックで危ない事ばかりだ。

元村彰治朗が、剖検を済ませた弥生の死骸を引き取り、帰ってきた。死因は、多剤摂取による、中枢マヒと多臓器不全。

掛かりつけ医院の出した薬をいっぺんに何日か分と、通販の外国製薬剤を複数飲んだかららしい。胃からは、アメリカ製の薬剤の、巨大な溶け残りのカプセルが、12個見つかった。

これから、親族に連絡して、葬儀の手配をせねばなるまい。

が、上の娘、山口洋子の携帯はつながらないし、神戸の高級住宅地に嫁いだ下の娘は、

「ねーちゃんのおかげで、マスコミの攻撃に遭ったし、子どもも、私も、幼稚園でスルーされているのよ！お父さんとお母さんの性よ！」

と、言う事だから、知らせても、来る事はないかもしれない。

田中節子は、ビーズの作品をブログにアップした。

アクセサリーだけでなく、小物やインテリアも手がけていて、アクセス数は一日100前後。出版社から、ブログ書籍化のお誘いもきている。

で、その他に、吉平に報告する事があった。

「・・・でね、大阪の（泉州の人間が大阪と言うと市内の事）編集部に行かなあかんねん。それと、あの・・・検査薬で反応出てん。」
保育園年中の敬子を産んで以来、2人目不妊と、陰口を叩かれてきたゆえ、喜びはひとしおだ。

「ほんまか?!」

「でも、このあいだ、キンメダイ食べてしもた。」

吉平は、この間、田辺沖で、大当たりが幾つかあったのだ。

キンメダイは、妊婦に悪い。

生物濃縮が進んでいるから。

「だんないやろ。（問題ないでしょ。）どうせ俺等の世代は添加物漬けや。せやけど九割五分正常やで。」

吉平の神経は図太い。だから、公務員に向いているのかもしれない待遇が、いいと、やつかまれるが、その実、クレーム処理班のようなお仕事ばかり。

先日も、泉州にも南下してきた、プロ市民なるものに、コンビニにたむろする、タチの良くないお子ちゃまをどうにかしろと、吊るし上げられたばかりだ。

「キタ、キター!」

と、吉平は、ここにもイノシシが発生したかのように、のんびり構えている。

ま、そんな態度がプロ市民のお気に召さないらしく、余計いじめられたが、する事はした。

ヒマ、こいている年配者に、市民見回り隊なるものを、結成させ、動いてもらったのだ。

吉平は、キンメダイの、生物濃縮のような事が、山口洋子、あゆみの親子に起こっているのかもしれないと思った。みんなに注目されているが故。

節子は、地味で目立たないから、そんな事起こらない。

木村みどりは、キッチンに無造作におかれている、葉つきの泥まみれの大根に困惑していた。地元の人との交流はない。とりあえず、そのまま、ビニール袋に入れて、朝ごはんの用意をして、洗濯機を回し、ダンナを送り出した。

洗濯物を干し終わると、薫が降りてきた。

「あの大根、どないしたん？」

「畑のおばちゃんがくれた。」

「どこの？」

「古くておつきいおうちの、向かいの。犬いっぱいいる。」

みどりは、わかった。田村と表札があり、犬がたくさん放し飼いになってるうちだ。

お礼にお菓子でも下げていかなばなるまい。

「あのおばちゃん、学校は？とか聞かへんし、エエ感じやった。」

みどりは、地域にはそういう人もいるんだから、そろそろ、CD-ROMだけの学習もやめて、リースクールに行かせねばなるまい、と言う気になった。

週間婦人編集部では、富雄が、集めた資料と格闘していた。

あれ以来、山口あゆみは、脱走したまま見つからず、山口洋子は、別居先のアパートで、性感染症を放置した死骸で、発見。山口洋子と、関係を持った男達に聞いてみると、一人が、上町のタワーマンションを買い与えようとしている矢先に、携帯の連絡が取れなくなってしまうらしい。男は、山口洋子のアパートは、知らない。見栄っ張りの山口洋子が、みすばらしいアパートに住んでいることなんか、男達に教える事なんてないだろう。

祖母の元村弥生は、引きこもりになり、薬物中毒で死亡。

山口一郎は、離婚して、実家の両親の借りたマンションに住んでいる。

山口緋那は、養護施設に収容された事はわかったが、プライバシーの問題もあって、それ以上調べるのは、困窮した。が、子どものいない社員に、サクラになってもらい、養子縁組をする夫婦の振りして、状況を聞きだした。

その養護施設には、海外からも、養子縁組を希望する夫婦が来るらしい。

施設側は、臓器売買が目的でない事をしっかりと確認して、送り出すそうだ。

山口緋那は、かわいいので、普通の子なら、日本人夫婦にスグ貰われるところ、ネットで、面が割れているので貰い手がないらしい。いつ、山口あゆみのように、牙を剥くかわからないものを、貰う事はない。

が、アメリカの某富豪が、熱心に養子に欲しいと、交渉中だそうだ。その富豪は、ダウン症の養子もいる。

なんでも、「普通の子が成人するのは当たり前。不利な条件の子が成人するのは素晴らしい。私達はそのミラクルを見たい。」との事らしい。

田村奈津子は、ボランティア仲間の忘年会の帰り、その一人に車で近所まで送ってもらった。

ふと、空を見上げた。飛行機のライトが見える。

「山口緋那ちゃんが乗った飛行機かしら？」

実は、田村奈津子は、面会にもいかない山口洋子の家族に代わって、面会に行っていた。

コーギー犬のバナナを結果的に引き取る事になったことだけでなく。何回目かに、面会に行ったとき、山口緋那は、こう言った。

「ひなちゃんね、あめりかのおっちゃんとおばちゃんと、あめりかいくの。」

母親と別れたことなど、忘れたかのような幼い無邪気さが不憫だ。

「あめりかのおおきいうちにすむの。」

田村奈津子は、赤い靴はいてた女の子異人さんに連れられて行っちゃった、のフレーズを思い出した。

山口洋子の家族が、悲劇的な結末を迎えつつある時に、この子だけに希望が持てる気がした。

しかし、山口あゆみは、一体どこへ行ってしまったんだろう？

男は、山口あゆみの死骸を車で日本海側まで運び終えた。

所有のクルーザーは、こちらへ回させてある。

初冬の海風が、痛いほど冷たい。

男は山口あゆみの死骸を、クルーザーに載せると、あるポイントまで運んだ。

何を沈めても、決して浮き上がってこないポイント。

ソーシャルネットワークキングサービス、SNSで、漁師や釣りマニアに聞いた。

そこへ、大型コンテナに入れた死骸を沈めた。

あつという間に見えなくなる。

それを確かめてから、男は、ポイントを離れた。

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連に横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能^{たんのう}してください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n7112e/>

続検品母

2011年1月23日06時26分発行